

# 佐伯啓思『自由と民主主義をもうやめる』

## 第二、三章

2009/05/30

2回、安達千李

### 第二章 自由は普遍の価値ではない

#### ■ある古い旅館の光景

- ①坂東旅館をみるにつけ、連合赤軍事件が思い出される。
- ②坂東旅館は連合赤軍の指導者の一人坂東國男の生家。

#### ■全共闘の平和主義と暴力主義

- ①当時の学生→1、全共闘派。2、民青派。3、ノンポリ（著者はここ）。2と3の間に市民運動家。
- ②二つの異なる方向
  - 1、民主主義、平和主義の実現に向かう。
  - 2、暴力主義。弱者・被支配者の主張を認められるため。著者は2に共感した。

#### ■破綻は論理的必然だった

pp. 37, 11 1-4

#### ■三島が見ていた日本の欺瞞

- ①三島由紀夫の切腹事件は一人の中で完結していた。
- ②江藤淳によれば「ごっこ」。アメリカという「権力」を見据えていない。
- ③しかし三島の行動は平和日本の欺瞞を喚起させる。
- ④「左翼」が「サヨク」化した。

#### ■日本の社会科学はなぜ「サヨク」的なのか

- ①戦後日本の社会科学は左翼。アメリカから輸入されたもの。
  - 進歩主義的な思想を基にする。理性の力により世界を合理的・幸福なものにできる。
  - 理性以外の持つ権威や意義を認めない。
- ②①の理由 p. 41 1110-13
- ③しかし日本社会には非合理的な事が多い。
  - 集団主義的な企業、長期的雇用、封建的

#### ■学級民主主義が嫌いだった私

- ①民主主義的な討論の場においては、少数派は反論しにくい。
  - ぐ→政治収支の領収書発行、談合
- ②著者には、非合理を排除すれば世の中が豊かになるという近代主義的・進歩主義的考えがうまくいくとは思えなかった。

#### ■近代を警戒するヨーロッパ

①ヨーロッパは近代思想の原点。特にイギリス。

—イギリス→ロック、アダムスミス。フランス→ルソー、モンテスキュー。ドイツ→カント・ヘーゲル。

②しかし、イギリス、フランスには「近代」「進歩」を軽信する姿勢を避ける風潮がある。

—ロンドン周辺の自然。田園生活を重んじる。フランス・ドイツにもみられる。

#### ■西欧革新思想の根底にある、伝統への信頼

①民主主義や人権の尊重と、それに対する予防線としてのエリート教育。

—階級社会の名残。

②「伝統」と新しい「革新」的なもの間のバランスを図ろうとする精神こそ「保守」である。

—ギリシャ以来の「伝統」。左翼系学者すら重視する。

—ドミニク・ド・ヴィルパンのフランス語・フランス文化への信頼。

#### ■九〇年代の日本で起きたこと

①構造改革（規制緩和）が進む→徹底した進歩主義

②「新保守主義」

#### ■社会の土台を変革しようとする誤り

①構造改革が力を持った理由

—アメリカからの要求・圧力

②経済・政治制度は社会の「土台」の上に立つ

—歴史的条件、文化、人々の価値観と不可分

③土台のラジカルな変更は無理

#### ■伝統・習慣はなぜ重要なのか

①「新保守主義」の人たちが急進的改革を支持

—ヨーロッパとアメリカでは「保守」の意味が違う

②ヨーロッパ→エドモンド・バーク『フランス革命の省察』でフランス革命を痛烈に批判。

—政治体制・社会秩序の「継続」こそ重要。安易に合理主義的に社会変革が可能と考えてはならない。名誉革命では継続がうまく守られた。知恵・偏見を無視するな。

#### ■普遍的人権など存在しない

①仏人権宣言は社会秩序を一度解体し、人権を抽象化しているからだめ

②イギリスは統治や社会秩序と結びついている。権利は特定の歴史的文脈の中で意味を持つ

#### ■弱く頼りなき人間の知恵

①オークショットの発言→自らの弱さや頼りなさを補うための知恵

②英保守→コミュニティの重視

#### ■イギリス的保守の対局に位置するアメリカ

①アメリカの成立そのものが進歩主義的、急進的、左翼的。近代主義思想。

—建国の祖ピューリタンはイギリスでは革命派

②地域コミュニティの重視というイギリス流保守も見て取れる

#### ■「保守派」レーガンの急進主義

①レーガンはアメリカでは「保守」とされた

—個人主義・自己責任に基づく市場原理主義→自立と自助＝アメリカ建国の精神

—福音派の復興→ピューリタンの思想の復興

②ヨーロッパからすると保守ではない。自由主義や宗教急進主義。

③サッチャー政権→イギリスにおけるレーガンのものと似た政権

#### ■世界のアメリカ化を目指したネオコン

①2001. 9. 11 以来、ネオコン（新保守）が台頭

—自由主義・民主主義・市場経済を絶対視。敵に対しては武力行使

②ナチズムや社会主義から逃れてきたユダヤ人中心

③社会主義崩壊後はイスラム原理主義、アラブ諸国

—ブッシュの失策以来、影響力後退

#### ■日本にアメリカ型保守は合わない

①国の歴史に即して社会を変えていく、歴史的・文化的コンテキストに即して問題を解決していく

—バークの主張、また著者が支持する保守のあり方

②根底で日本的価値を保持すべき

#### ■日本で「保守」を唱える難しさ

①「戦後を疑う」ことが出発点。

—WWIIで日本的精神・価値がわからなくなった。アメリカ的近代主義のこそ普遍的価値。

②自由そのものは否定しない。自由で何を実現し、自由でどのような生活をするかは日本の文化の問題。

#### ■ねじれ国会も格差問題も同根

政治に民意が反映されている。その結果として民主的な意志決定ができなくなった。

—民意の内容、質が問われるべき。

#### ■すべては「戦後」の見直しから

①日本における精神の空洞化。価値・規範の崩壊。

②価値基準の再構築が必要。戦後という特殊な時空で生じていると考える。

—戦後の見直しこそ保守の基本的課題である。

### 第三章 成熟の果てのニヒリズム

#### ■ニーチェとの出会い

ニヒリズムが現代社会の決定的問題である。

#### ■道徳・正義の裏に潜む権力欲

①現代人の道徳・市民的意識・正義などは根拠のない欺瞞である

—そんなきれい事は通らない。他人を支配したいという権力欲がある

—弱者が自己保身のためにつくったものだ。ヨーロッパでいうとユダヤ・キリスト

②「力への意志」を否定はしないが、それが虚飾されるのは「不健康」である。

#### ■すべての価値を破壊する能動的ニヒリズム

①ニヒリズムとは最高の諸価値の崩壊である。

②能動的ニヒリズム→欺瞞を破壊し、新たな価値を創造する。

—それは「超人」がなすことである。

#### ■文明崩壊の予兆としての第一次大戦

①近代化が進むヨーロッパには価値の根底が不在（ニーチェ）

②シュペングラー『西洋の没落』

—文化と文明→前者がある土壌における歴史的価値を含み、後者は根を持たない抽象的なもの

—20世紀は19世紀にヨーロッパが達成した近代文明の崩壊する時期ではないか。

—そして、ニーチェが読まれるようになっていく。

#### ■何も信じるものがない消極的ニヒリズム

①ニヒリズムの2つめの意味→「消極的ニヒリズム」

—価値が崩壊し、新たな価値が創出されない状態

②自由、民主主義などが実現される→それらに強い価値を感じなくなる

—結束をやめ、個人の欲望を追求するようになる。↳フロイト

③オルテガの「大衆人」

—自分の力のみ信じるようになり、WWIへ

#### ■文明の高度さが生きがいを喪失させる

①現代、自由、平等、豊かさなどがほぼ実現された。

—「使命感」の不在。

②1920年代、30年代のヨーロッパでも同様の状況であった。

—ロストジェネレーション。

③哲学者の問いは「文明が高度化した中で使命感をもって生きるにはどうしたらいいか」

#### ■ファシズムとの戦いとしての第二次大戦

WWII、ナチスのユダヤ人ホロコースト

—WWIIはファシズム対自由・民主主義（アメリカ）

#### ■自由・民主主義の絶対性への回帰

①近代化の価値が崩壊したニヒリズムから自由や民主主義をまもることが文明の使命であるという考え方へ。

②アメリカにより西側自由・民主主義サイド対東側全体主義サイド、という構図。

③WWII、冷戦に共通する「進歩主義」

—アメリカ主導で人々を専政から解放していく。

## ■再び隠蔽されたニヒリズム

- ①冷戦の終結＝「自由・民主主義実現へ！」という使命が失われ、再びニヒリズムへ。
- ②しかし、なぜか90年代はアメリカ主導、グローバリズムという形で「自由・民主主義実現へ！」

## ■野蛮なテロリスト対文明社会の戦い

非合法的なテロリストから文明社会を守る、というイデオロギー

## ■若者はなぜすべてをなげうったのか

- ①9.11のショックから、イスラームへの興味へ  
—あえて自由・民主主義に攻撃したのはなぜか。
- ②西洋近代社会が生み出した価値観に対する強烈な批判である。

## ■西洋近代的価値への激しい攻撃

アメリカが掲げる民主主義の普遍性があやくなる  
—イラク攻撃の過程でぼろが出ていった

## ■ついにニヒリズムに直面するアメリカ

- ①イスラームの宗教国家、欧米は政教分離が基本  
—イスラーム国に自由・民主主義が根付くとは考えにくい
- ②イラク攻撃で最もダメージを受けたのはアメリカの近代的価値観である

## ■ヨーロッパ社会のしたたかな知恵

ヨーロッパ→歴史、伝統の中に生きる。保守的な知恵。  
—イラク攻撃に対するアメリカとの態度の違い

## ■生命至上主義も自爆テロもニヒリズムの表れ

- ①生命至上主義→ただ生きていけばよい。何かに命をかける必要はない。  
—9.11では、命をかけることの価値が示された
- ②生の意味が薄れる虚無感を解消するため、攻撃したのではないか。

## ■なぜアメリカでキリスト教が復興しているのか

- ①アメリカ（キリスト教国家）対イスラーム諸国という構図
- ②アメリカでキリスト教復興がみられるのは、ニヒリズムの状況から価値観を求めているから

## ■二十世紀初頭によく似た時代状況

20世紀初頭とのアナロジー  
—世界戦争を示唆するのではないが、ニヒリズムが根深い

☆このあたりから、我々日本人がニヒリズムをいかに克服していくかという議論へ。

## ■京都学派「世界史の哲学」の時代的意義

## 日本の立場をつくろうとした京都学派

—帝国主義の時代に、日本はどのような価値観を掲げるべきかを問うた＝「世界史の哲学」

### ■力による支配から道と義による支配へ

- ①西洋によるアジア支配の動き＝「世界史」のはじまり
- ②日本が、道義を掲げてアジアを主導していくべきだ  
—道義の具体的内容が不明→王道という考え方はあるが…  
—一つの哲学を世界に発信しようとしたところは刮目に値する

### ■日本文化の革新にある「無」

- ①ゲーデルの「不可能生の定理」（「不完全性定理」）  
—いかに合理的な体系も自身を基礎づけることができない
- ②これに対し西田幾多郎  
—「無」が根拠となりうる。すべてが「無」「空」であるからこそ、意味が成立する。

### ■ぎりぎりの思想的試み

- ①京都学派による価値観は世界に通用しなかった  
—大東亜共栄圏という短絡的戦争イデオロギーに利用されるにとどまる
- ②しかし、世界的ニヒリズムに日本はどのような立ち位置で望むべきかに挑戦した唯一の試みであった

### ■日本的価値観を掲げる以外に道はない

日本的価値観とは→pp. 118 11. 4-9